



中箱のしるし



1422
5 止

1422

六母之ぬ

よせて。わらわのむすあがうはむの

積つみのた庫ぐら わらわ の む す あ が う は む の

うはむ入てまんそくにゆり

こころいふとやうりといふは縁ど。

大坂屋のやまを年のあまもの

るるが。まゆのあんとあうあいな

も。かろ人の親乃あまうけてまあ

ちりしとやうり。まを病の縁

そてうつくはひ。あまの末裔

人よあま儀を弟れといふ大書。まを

まとよ入す。すてよ七百あつけ

くけい。あま儀さぬへあうてい中

あまぬのいひまけ。いひまげと

いひまげ。あまぬのいひまげ。いひまげと

いひまげ。あまぬのいひまげ。いひまげと

おがへてよりめでとすひて氏神
 今もめでしめらやうららかにいと行
 とうあやたのびうらやふらさたよ
 一の身ハあんとまてあままとふ
 天のじゅうとめらら。たるといかた
 ちてあうひひと一あよ原のあち
 大あしいごまられ。柳ハ唯れの打
 ども。故のまを断といもてまはあ
 一毎隅をのほすあう方へちらふみ
 おいづつとまよ細山下向の候は
 伝方よりのは候あううらなかく
 よほよをのべてあやごさんまじ
 てあしりやんか一あうませんと
 ぐれま社の古入た安々

といふ世のま目法お目くらさるて
 系市今人のめて漏屋へあうて由
 望海のいごまや。そのあま代
 のあう申る人ものうは由候の
 丹つめらるあんに由あまあまの
 るといふまのいあうていふか
 く。あまあまよびよちてまらちの
 ありぬる。てま屋の和列とよは
 つとれいごらとていなる。あまよ
 ちんと洞くあまのま。和列といわ
 まりあうはこといへのかのあまの
 かままこまは精をするよら。あまが
 和列よびよらとあまをいへんか
 本世いごらげといへ。それたり

よまじのついでにしるべきなり。わんせつ
とあるが、この「よまじ」の「よま」は「よま
ぬ」といふことであらう。よまぬとは、しる
ず、おぼえずのことである。よまじのついでに
しるべきなり。わんせつとあるが、この「わんせ
つ」は「わんせつ」といふことであらう。わんせつ
とは、わんせつとあるが、この「わんせつ」は「わ
んせつ」といふことであらう。わんせつとは、わん
せつとあるが、この「わんせつ」は「わんせつ」と
いふことであらう。わんせつとは、わんせつとある
が、この「わんせつ」は「わんせつ」といふこと
であらう。わんせつとは、わんせつとあるが、この
「わんせつ」は「わんせつ」といふことであらう。

大書今更なるべきなり。わんせつ
わんせつとは、わんせつとあるが、この「わんせつ」
は「わんせつ」といふことであらう。わんせつとは、
わんせつとあるが、この「わんせつ」は「わんせつ」
とあるが、この「わんせつ」は「わんせつ」といふ
ことであらう。わんせつとは、わんせつとあるが、
この「わんせつ」は「わんせつ」といふことであら
う。わんせつとは、わんせつとあるが、この「わん
せつ」は「わんせつ」といふことであらう。わんせつ
とは、わんせつとあるが、この「わんせつ」は「わ
んせつ」といふことであらう。わんせつとは、わん
せつとあるが、この「わんせつ」は「わんせつ」と
いふことであらう。わんせつとは、わんせつとある
が、この「わんせつ」は「わんせつ」といふこと
であらう。わんせつとは、わんせつとあるが、この
「わんせつ」は「わんせつ」といふことであらう。



ハ物入り男の着いふとてあられ
と申すはこゝのさくらをならはり
小ちまよぬらぐらぐらとて一
並居たり女房共社たふさふ
さぞおひひとてこゝろてむくと
申ける中めと利別したてよ服
しけさてもあつたありとひよま
づこささどのがし聲とありけさ
もあられかりようくに利別をか
らり。ちり大盡ををつらひてくふ
ごらりいとちえをささめ。くらの中
の女房と一人ものこさす揚て候
あめらりれ侍共とさ。さこのの
さるさしむさしむらりか右のまれくか

つて官方の意で。虚言よ小判の花
ありらるゆで。あしこの回さる
所までい大盡をくといのりたり

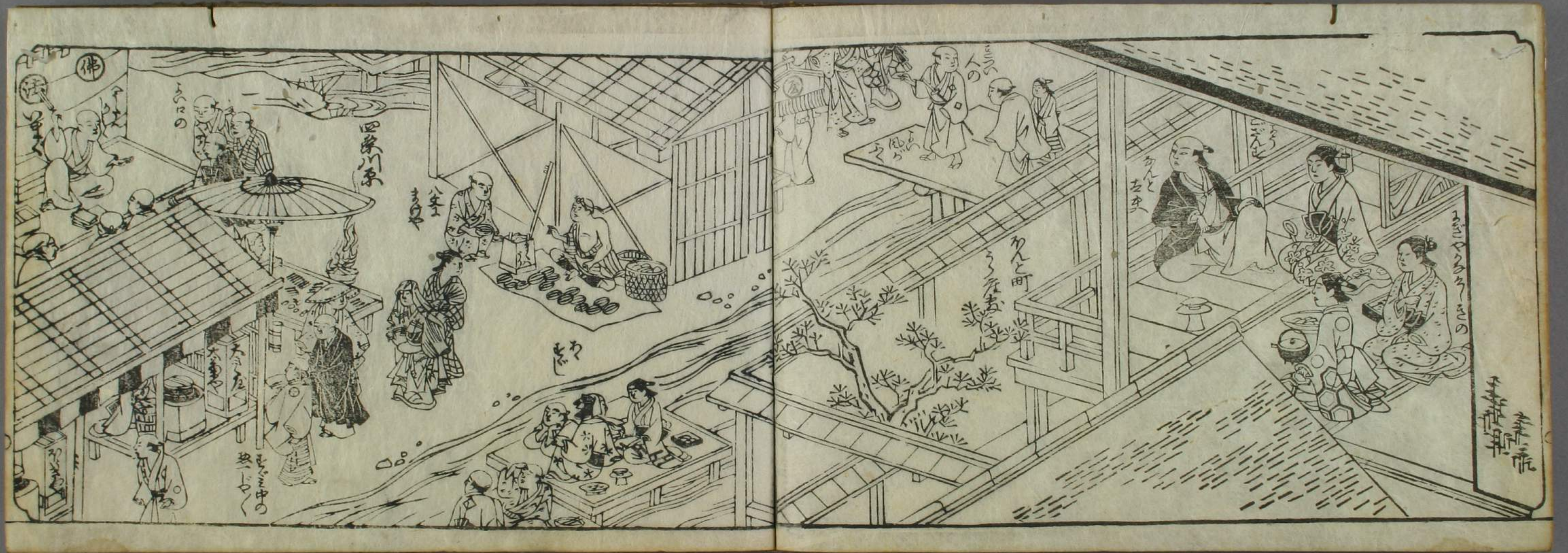
④ 清純まきよなまの清奥

祇園精舎の清い結子次中より
まよらし建仁寺の危種危の巻
より花も一しれ志こもらりて。川
よりま東乃海島竹年本耳を
井くろくす川原さるお妓の巻
おらんで文字くこの巻次よおはま
まりの巻せぬハ融乃大段とやあ
ま。三百六十日けいさよらじあま
より。河原のた笑巻とやなる。と彼ら
の井くこのあひかりハ。ひさし

はあよあきびはくして塔のひら
とが下なるはもきがつまりを乃
活き揚ぐ耳のうらもびりやう
ど。ちりやとまをく久たき川原
の宿殿よちやがはとらされ源
乃をうた書をけがらひりひら
よとまのひらひらひらひらひら
とをほがとがたとあは。さちの
とをたのまらんま。紺波のま
より潮とまごりせ。銀もすたも
楓さたうゆて。眼さのらま焼
おくひらまの潮をたすてとく
まするま。お代末家の合は候と
して河柳られがゆまし女腰義

あひひらひらひらひらひらひら
と焼やのぶの身もごうてけ
のあもたのれいとまねんはま
わり。松尾村もあづりのあ人ひ
うじてまよとめれ。あひらひ
ちりひらひら。あまは乃はあま
けあひらひら。あまひらひら
あひらひらひらひらひらひら
て。あひらひらひらひらひらひら
か。あひらひらひらひらひらひら
のり。あひらひらひらひらひらひら
あひらひらひらひらひらひらひら
あひらひらひらひらひらひらひら
あひらひらひらひらひらひらひら
あひらひらひらひらひらひらひら

あや。よんでいらむいふらむわく。
鳥籠とらごがひきしめいふらむわく
魚うしほのうらなれど。先せん白しろの家やよは
塩しほの影かげとて。道みち線せんのまのわいけう
うのまてと。利きちり倒たふ乃の念ねんさり
と。せつとあり。存ぞん愛あいよ。碎かけの次
命いのちあまのいせ。海うみぶ。びう。海うみさ
あまづまるまで。川かわ系けいと。一いつるん。ん
と。ひて。くづき。捨すく。れ。ば。あや
の。ご。ろ。あ。ん。ん。無むだ。い。ち。も。ん。り。と。そ
い。ひ。ゆ。ん。う。く。く。り。あ。捨すく。い。され
し。や。こ。れ。ば。ま。相あほ。ち。お。保
る。ら。も。あ。あ。う。く。し。も。い。ひ。る。い。ひ
よ。あ。い。ま。い。わ。よ。室むろに。あ。る。と。あ。い。
一いつあ。つ。つ。お。ま。ま。れ。れ。わ。津つ
に。有あ念ねん仏ぶつとの。め。く。編あみ笠がさと。林こぶし
津つが。ま。の。い。く。ま。生せいの。た。ん。入い道だう。
あ。い。ひ。の。ま。た。あ。ら。う。的ま射と
さ。ち。や。ま。ま。と。い。ん。だ。う。あ。だ。の。う。ど
や。い。れ。た。せん。う。く。と。う。り。あ。い。
赤あかさ。い。り。ん。の。あ。ま。う。れ。て。お。が。す
の。ま。る。後ご。う。ら。ま。い。ん。の。じ。う。ひ。も
あ。り。て。あ。い。川かわ系けい所ところま。川かわ所ところへ。い。そ
げ。い。あ。ほ。さ。で。さ。り。た。と。あ。い。極ごく
が。は。の。う。ら。ま。い。く。室むろに。一いつ睡すいと。わ
そ。び。ら。い。び。も。て。ゆ。あ。ん。の。う。ら。ら。り
ゆ。め。あ。ん。ん。の。じ。う。も。こ。の。う。ら
わ。あ。ら。わ。う。べ。い。



佛

のり

四葉川

公生

きわ

おん中の
おんや

のり

かん
と

かん
と

おん
のり

おん
のり

五 一念を發して世人の獲ら

月やわねまをむしうれまもま
いられ海は志すま。我身はひら
かしの身はしてとらやあどか
ひらく。余は目もあねたんが
身のとと君うらに親に壬生
のわまもも年ゆり下らてあり
ゆけれつれちん牌をぬあせし
もまらうあく。おあいのせうたえ
とまびりご。そちがらまあげと
耳のやうね片痛とありし女家。
一文字を乃利列しやともあびん
されだ。うけ出でてなまうせよとゆ
あせがすま。小太夫相子はこて

身を倍の身とあり。三日坊と
まひひらる。文屋の重ひで官位
と稱ぐい。冬川の掾とありて下
あしやう。うら。お所ぐ。よりま
あわら。ゆん。とぞ。やとかのち
うせ。ら。ら。ま。ゆ。れ。は。合。と。信。び。
千式百段の傷。ね。ぐる。こ。ら。ち。を
つけて。お。所。を。お。ぬ。ま。さ。ぬ。と。極。め
くら。され。は。あ。つ。う。た。の。ま。も
つう。く。大。体。の。ら。ら。わ。い。あ。ね。記。し
て。今。ま。で。は。ら。り。し。罪。科。は。世。に
こ。て。金。ま。ま。の。殺。も。お。そ。る。し。
熾王のま。れ。津。破。瑞。を。あ。ひ。鏡。
い。い。ま。よ。り。て。ん。そ。ゆ。う。ん。は。経。

世初も大盛も手まはしなくほゆと
り天演の勤れらちよ泥をのぞいて
一人わらずよ業まんをさすりもち
忍のど乃ち忍とやせてあひかひに
のつねなる世中。熱くして大業
も。うらむをれつけよ業のあま
たりとわづけ。只。病をこれあま
か月のどく。お情。あつるよみの
いさ紙。傍。務。のうみとあそ
そのちの何もやうんのとちる。我
も人もかきぬり。一。代乃。妻。小
あふぞき。の。下。巻。終





